



ブロンスワフ・ピウスツキ没後百年記念
講演の集い(2)
～ポーランド、サハリン、北海道～

講演

井上紘一(北海道大学名誉教授)

ブロンスワフ・ピウスツキの生涯と仕事

新井藤子(北海道大学大学院)

日本で取り込まれてきたブロンスワフ・ピウスツキ
研究の系譜



ブロンスワフ・ピウスツキ百年忌追悼行事
白老・旧アイヌ民族博物館, 2018.5.17

ブロンスワフ・ピウスツキ(1866～1918)はポーランドの優れた人類学者で、樺太島に流謫され19年を過ごした極東でアイヌ・ニヴフ・ウイльтаなど極東先住民研究に従事、1903年には白老、平取を訪れてアイヌ研究を行い、この分野では草分けと評価されています。1980年代半ばに北海道大学が彼の収録した録音蠟管の音声復元に成功し、アイヌ最古の肉声の復元が話題になりました。2013年には白老に彼の記念碑が建立されています。

昨年は彼の没後とポーランド独立回復の百周年に当たり、今年も日本・ポーランド国交樹立百周年を慶賀して、さまざまな行事が行われています。

昨年7月の没後百周年記念の集いにつづいて、今年も専門家二人による講演の集いを企画しました。奮ってご参加ください。

プロフィール

井上紘一(いのうえ・こういち)

北海道大学名誉教授、ブロンスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌:二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта、東北大学東北アジア研究センター刊、2018ほか

新井藤子(あらい・ふじこ)

北海道大学大学院修士課程、ピウスツキと日本、北海道、先住民族、POLE 87、2016.1ほか

会場:北海道大学学術交流会館1F第4会議室

日時:2019年3月16日(土)13:30～16:30(開場13:00、入場無料、予約不要・先着50名)

主催:北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、北海道ポーランド文化協会
ポーランド広報文化センター

後援:駐日ポーランド共和国大使館、(公財)アイヌ民族文化財団

連絡先:スラブ・ユーラシア研究センター(越野)gkoshino@slav.hokudai.ac.jp

北海道ポーランド文化協会(安藤)hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956

(図)ブロンスワフ・ピウスツキ, Adomas Varnas画, 1912, ユゼフ・ピウスツキ博物館所蔵、画像提供 Witold Kowalski
この企画は、日本・ポーランド国交樹立100周年(1919～2019年)記念事業の一つとして、実施されます。



駐日ポーランド共和国大使館



講演要旨

ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事 井上絢一

リトワニア生まれの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866.11.02~1918.05.17)は19才の折、露帝暗殺未遂事件に連座して樺太島へ流謫され、壮年期の19年を極東で過ごすよう強いられました。その間、サハリン原住民研究に従事して同研究の草分けとなり、1903年には樺太アイヌ(エンチウ)の「酋長の娘」と結婚し、「極東のピウスツキ家」の開祖となりました。この家族や2016年の生誕百五十周年、2018年の没後百周年にかかわる事柄にも言及するつもりです。

ブロニスワフ・ピウスツキ略歴

- ①リトワニア期(1866.11~1885.04):母の相続領地ズーウフ(ザラヴァス)で生まれ、8才以降はヴィルノ(ヴィルニユス)で暮らした。ヴィルノ第2ギムナジア7年次修了後 Санкт・ペテルブルグへ留学
- ②露都滞在(1885.04~1887.05):ペテルブルグ帝大法学部1年在籍中、皇帝暗殺未遂事件に巻き込まれ、「懲役15年・樺太島流謫」と宣告された
- ③樺太期1(1887.08~1899.02):国事犯流刑囚として北樺太ルイコフスコエ村で服役する(1/3減免された刑期は97.02.27に満了)。土着民ギリヤーク(ニヴフ)のフィールドワークにも従事し、人類学関係処女作を公刊
- ④浦塩期(1899.03~1902.07):ロシア帝室地理協会アムール地方研究会付設博物館物品管理人に採用されウラヂヴォストク(浦塩)在住。博物館では司書・主事も務め、沿海州行政府統計委員会や地元新聞社にも勤務
- ⑤樺太期2(1902.07~1905.12):ペテルブルグのロシア帝室科学アカデミーの委嘱で樺太島に舞い戻り、樺太アイヌやオロッコ(ウイルタ)のフィールドワークに従事。膨大なアイヌ関係業績はこの3年半の所産
- ⑥日本滞在(1905.12~1906.08):欧州への帰途、日本に7ヶ月半立ち寄り、様々な日本人(二葉亭四迷など)、中国人革命家、亡命ロシア人らと交流する。アイヌ関係処女作を日本語で発表
- ⑦欧州期1(1906.09~1915.04):オーストリア統治下のポーランド(ガリツィア)に定住し、第1次大戦勃発後ウィーンへ逃れる
- ⑧欧州期2(1915.04~1917.11):戦火を逃れて中立国スイスに滞在し、様々な政治・社会・文化活動に従事する
- ⑨欧州期3(1917.11~1918.05):ポーランド国民委員会パリ代表部スタッフとして活動するも、1918年5月17日、セヌ川へ身を投じて自死を遂げる。享年52。

参考文献

- 加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号、1987)
- 沢田和彦編『ポーランドの民族学者 ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』(埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書5、2013)
- 井上絢一『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』(仙台、東北アジア研究センター叢書第63号、2018)
- 同「ピウスツキのサハリン研究とバフンケの髑髏」
(<http://hokkaido-poland.com/events/PilsudskiInoue20180225.pdf>)
- 同「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」(改訂版)
(<http://hokkaido-poland.com/events/ChronologicalRecord201807.pdf>)
- Majewicz, A. F. (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, Vols. 1-4 (Mouton de Gruyter, 1998-2008) [Vol. 5: ニヴフ篇、印刷中]
- Pilsudskiana de Sapporo*, Nos. 1-6 (Sapporo/Saitama/Hirakata, 1999-2009)
- Sawada, K. & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Pilsudski*, Vols. 1-2 (Saitama, 2010)